



第6回 東京湾の日・川柳コンテスト 入賞作品

選評 審査委員長 稲田 眸子(いなだ・ぼうし)

6回目を数えた「10月1日は東京湾の日」川柳コンテストは、今年もまた「東京湾の日」を飾るにふさわしい力作揃いであった。「東京湾の日」大賞、秀作、佳作について選評を添えさせていただいた。選評者は、審査委員長の稲田眸子氏である。

選句にあたっては「ユーモア感覚が表現されているか」「日常の喜怒哀楽が表現されているか」「社会風刺が表現されているか」「東京湾のテーマが表現されているか」「選者の心に響く作品か」をポイントとした。なお、過去5回に亘るコンクールにおいて発表された作品と類似していると判断された作品については、最終選考時に留意した。

「東京湾の日・大賞」川柳1名)、秀作3作 佳作6作 合計10作品

東京湾の日・大賞

〈一般〉

義理チョコのお礼に穴子ねだる部下

松尾 恵利花 東京都

〈評〉高層ビルの林立する東京湾。コンテナ港、航路で賑わう東京湾。その足元に、砂泥の海底に身を沈める穴子たち。湾内の小魚・甲殻類を食べ、江戸前寿司文化を支えてきた存在が「江戸前の穴子」である。

義理チョコを配るイベントは一見「軽い社交」のように見えるが、その裏側には女性特有の、きめ細かい心理の層がいくつも重なっている。気遣いができる人と思われたい、周囲と協調できる人として見られたい、仕事の関係を円滑にしたい、そんな思いを秘め配られる義理チョコ。事務的なものだけではなく、季節のイベントを楽しみたい、相手の反応を覗いてみたい、職場の雰囲気をもたせたいといった、ちょっとした遊び心もまた込められているようだ。この軽い遊び心が職場の潤滑油にもなる。

この句、義理チョコを「投資」と見なしているようだ。お礼を「穴子」で回収しようとしている。しかも上司に対して堂々とねだっている。この人間の打算の可笑しみ、哀れ、ユーモアが、この句の魅力。軽い社交イベントを重い要求で回収しようとする「部下の食い意地」を、川柳らしい軽口と喜怒哀楽で切り取ったこの一句を、迷わず大賞に推挙する。

東京湾の日・大賞

〈キッズ〉

おじさんのくまでおっきいずるくない？

石川 新泰 茨城県

〈評〉川柳は人間の弱さ・ズルさ・ちゃっかり感を笑う文芸。おじさんは大きい熊手を持っている。それを当然のように使ってアサリを掘っている。子どもから見れば「反則」に見える。この反則の可笑しみが川柳ならではの笑い。

子どもの正義感は大人の効率や合理性とはまったく別の尺度でものを見る。その純度が「ずるくない？」という一言に凝縮されている。しかし、その語尾は柔らかい。幼い子どもたちは、大人の行動をよく見ている。アサリ掘りという場面で、大人が大きな熊手を使っていることに気づき、その違いを「ズル」として捉える感性は子どもならではのユーモア。

川柳は「人間の可笑しき」を描く文芸。子どもたちはその可笑しきを、大人よりも純粋に見抜き、表現できるようだ。

〈一般〉

秀作 3句

お帰りと湾の魚に言いたい日

綾部 保知 茨城県

〈評〉都市の喧騒、人工の埠頭、貨物船の影、浄化と汚濁の歴史、回遊魚の出入り、これらが折り重なる東京湾。その湾に棲む魚に「お帰り」と言いたい日は、東京湾を慕う作者が「帰りたい」「戻りたい」と感じている日なのである。

この句、「海」ではなく、「湾」と表現。「湾」には囲まれた生活圏の感じがある。港町、漁船、そこに暮らす人々まで自然に想像される。この句の「お帰り」は、魚に言っていると同時に、東京湾を慕ってくる人間たちにも向けられた言葉とも読める。この句、「言った」ではなく「言いたい」との表現にも注目。「お帰りと湾の魚に言う」と表現すると、魚が戻ってきた喜びをそのまま表した句になるが、「言いたい日」と一歩手前で止めたことで、魚が帰ってくるのを待ち続けてきた作者の思いが滲む。「今年は魚が戻ってきた」「湾がようやく昔の姿を取り戻した」との感慨が込められているのである。さらにまた、「お帰り」という日常語が効果的。本来、人に向ける言葉を魚に掛けることで、湾の魚が単なる漁獲物ではなく、毎年帰っ

てくる顔馴染みのような感覚になる。川柳らしい人間臭さと、ささやかなユーモアのある句。

手が伸びる江戸前寿司は足が出る

青木 知恵 東京都

〈評〉川柳は、人間の打算の可笑しみ、哀れ、ユーモア等を描く文芸。この句、「食べたい」「つい頼んでしまう」「出費がかさむ」「予算オーバー」、その結果、「後悔してしまう」... 前のめりの欲と、遅れてやってくる現実のズレが、川柳らしい笑いを誘っている。

「江戸前寿司」というちょっと背伸びした贅沢が、ズレの可笑しみを増幅している。そして、「足が出る」というオチもまた効果的。もしこれが「寿司」だけなら、可笑しきは半分になるであろう。

つい食べてしまう。つい贅沢してしまう。そしてその後で「やっちゃった」と思うこの「つい」の世界が川柳の醍醐味。「欲望の前のめり」と「財布の現実」が、「足が出る」の言葉によって、ズレた感覚を楽しめる句。

目と口で東京湾を食べ尽くす

桑原 智恵子 大阪府

〈評〉東京湾は、観光、消費、人の流入、経済のうねりなど、現代の「巨大な食欲」を象徴する場所。それを「食べ尽くす」と表現することで、都市そのものの欲望を人間の欲望に重ねている。この現代的な感覚は川柳の得意とするところ。

川柳は身体部位の比喩が得意。「目は」欲望のスイッチ、「口」は欲望の実行、「食べ尽くす」は欲望の暴走、この句は、三段階のステップを軽やかに描いている。「目と口」という身近な器官が、突然、「東京湾」というスケールに挑む。この飛躍が川柳特有のユーモアを生み、人間の小さな身体が東京湾という巨大な対象を食べ尽くすという不釣り合いが、川柳の笑いを誘っている。「東京湾を食べ尽くす」という豪快さもまた、読者は惹かれる。

佳作 6句

クレヨンの青が減ってく孫の夏

堀 卓 千葉県

〈評〉この句の魅力は「青」に焦点を絞ったこと。孫が描くものとして、真っ青な空、真っ青な海、真っ青なプールなどが想像される。しかし句は何を描いたかを語っていない。ただ、「クレヨンの青が減ってく」と表現しているだけ。ここに読者の想像力が働く。青いクレヨンが短くなるほど、孫は夢中になって何枚も何枚も絵を描く。その背後には、夏休みの午後や、日に焼けた孫の姿まで見えてくる。

そんな孫を見守る祖父母。孫が成長してゆく時間を、真正面から「孫の成長」と言わず、クレヨンの減り具合によってとらえたところに味がある。クレヨンが短くなれば、夏もそれだけ過ぎている。そして孫も、それだけ育っている。

青いクレヨンはまた買えるが、今年の孫の夏は二度と来ない。この句、笑いや風刺を狙った川柳というより、人間や暮らしの機微を掬い取った作品。「孫かわいさ」を前面に出さず、一本のクレヨンに託したことで、多くの読者を惹きつけるのである。

ゴジラどこインバウンドに尋ねられ

松永 智文 愛知県

〈評〉まず目を引くのが、冒頭の「ゴジラどこ」という、片言めいた短い問い。「ゴジラはどこですか」と整えず、「ゴジラどこ」としたことで、外国人観光客から突然声をかけられたときの生の会話が聞こえてくる。この五音には、観光地の雑踏や、スマートフォンを片手に道を尋ねる旅人の姿まで見えてくる。

続く「インバウンドに尋ねられ」も面白い。本来、自分が暮らしている日本なら、外国から来た人より日本人の自分の方が詳しいはず。ところが「ゴジラどこ」と尋ねられ、さて、どこだったか、と一瞬戸惑う。そのとき、外国人の方が日本の観光スポットに詳しいのではないかと、いう現代的な可笑しみが生まれる。

「ゴジラどこインバウンドに尋ねられ」は、現代の街角の一瞬を切り取りながら、日本人と外国人観光客の立場がふっと逆転する面白さを誘った一句。

べらんめえ俺たち魚も江戸っ子だ

米田 雅裕 福岡県

〈評〉何といっても冒頭の「べらんめえ」が効いている。この一語によって、魚市場の威勢のよい掛け声、職人肌の気っ風、少々乱暴だが人情味のある江戸の気風が、一気に立ち上がってくる。次に注目すべきは「俺たち魚も」という擬人化。江戸っ子なのは魚屋でも漁師でもなく、魚なのである。魚たちが胸を張って、「べらんめえ、人間ばかりが江戸っ子じゃねえ。俺たちだって江戸前で育った江戸っ子よ」と啖呵を切っているように聞こえる。「俺」ではなく、「俺たち」なのもいい。鮎種の魚、天麩羅になる魚、煮つけになる魚など、江戸の食文化を支えてきた魚たちが揃って名乗りを上げるような賑やかさ。

人間の江戸っ子気質を魚に映し、その魚から逆に人間を眺め返す。そこに川柳らしい軽妙な穿ちがある。普通なら「江戸っ子」は人間を指すが、「魚も江戸っ子だ」という論理の飛躍と啖呵。その瞬間に笑いが生まれ、ユーモアが溢れてくるのである。

大都市のでっかいおふくろ東京湾

石原 正人 東京都

〈評〉川柳は日常の感情を大きな対象にぶつけて笑いや親しみを生む文芸。「大都市」という無機質で巨大な存在、「おふくろ」という家庭的で温かい存在、その二つを「でっかい」で直結させる大胆さが面白い。「でっかい」は子どもっぽい語感を持つ。その幼さが、都市への甘えや親しみを滲ませる。

東京湾は、人・船・光・経済・観光・生活などあらゆるものを受け入れる巨大な受け皿。その包容力を「おふくろ」と呼ぶことで、都市の母性という新しい視点が生まれている。巨大都市の海・東京湾を「母」として感じるという大胆な比喻で、都市への甘え・親しみ・生活感を軽やかに言い切った一句である。

釣り上げた父の威厳はアジサイズ

西村 正明 東京都

〈評〉「父の威厳」とは本来、大きく、重く、揺るぎないものといったイメージを伴う言葉。それを「アジサイズ」と言い切ることで、威厳が一瞬で手のひらサイズの現実には落ちる。この落差が川柳の笑いの源泉。しかもアジは「釣りの初心者でもよく釣れる魚」。つまり父の威厳は大したことないと言っているのである。この含みが絶妙。

「釣り上げた父の威厳」には、自分の腕前を見せたい。家族に尊敬されたい。その瞬間の高揚感が宿っている。しかし次の瞬間、その威厳は「アジサイズ」だと判定される。父の高揚感と子の冷静な評価の落差が可笑しみを生む。この句は、父を揶揄しているようでいて、実はとても温かい。父は威厳を保とうとする、子はその姿をちょっと笑いながら温かく見ているのである。

父の威厳という大きなテーマを、アジという小さな魚で軽やかに詠ったこの一句。ユーモアと愛情が同居し、味わっているうちにほのぼのとした心持ちになる。

話すたび逃げたシンコが出世する

久保田 聡 神奈川県

〈評〉シンコ（新子）は、コハダ（小鰭）の最も若い段階の呼び名。体長3～5cmほどの極小サイズであるが、コハダ（小鰭）、ナカズミ（中墨）、コノシロ（鰹）という順に名前が変わっていく。シンコは「出世魚の最初の名」であり、名前が変わっていく運命を背負った存在でもある。

「話すたび逃げた」という描写があることで、シンコがまるで「逃げ癖のある人間のキャラ」としてイメージされ、そのキャラが「出世魚としての出世」と重なる瞬間、笑いが生まれる。最初は小さな出来事が話すたびに少しずつ盛られ、さらに盛られ、最後には別物になることを経験するが、この句もその類であろうか。笑いの中に一抹の哀楽を感じるのである。